

<期末テスト>

- 8日 テストの返却, 中間の討論とまとめ  
 14日 各自のテーマ決定へ  
 15日 同上

〔第2回〕4月15日(火)

この日は, 生徒たちに「総合学習をなぜ選択したか」をしゃべらせ, 生徒たちの総合学習へ臨む姿勢を問う最初の機会となった。

選択の理由としては,

- ・テーマに興味があるから 4名
- ・みんなとの話し合いが出来る 2名
- ・楽しそうだから 2名
- ・小論文などにも役立ちそうだから 2名
- ・面白そうな試みだから 1名
- ・発表力がつけられそうだから 1名
- ・漫画家になるための広い視野が欲しいから 1名
- ・先生の数が多いから 1名

などの比較的積極的理由が多かったが, 次のような消極的理由ももちろんあった。

- ・社会科などの他の科目をとる必要がないから 2名
- ・テストをやらないそうだから 2名
- また「生命について」どういう所に興味があるかを

「広告」の小テーマの中から選ばせたところ, 13名の生徒たちは次のように答えた。

- F君「生命の誕生, 神話・創世紀の世界」
- C君「神話・創世紀の世界, 宇宙の中の生命」
- I(Y)君「戦争と平和, 自殺, 差別, 霊魂, 性別コントロール」
- I(K)君「まだ分らない」
- O君「人間の心の問題」
- Cさん「まだ分らない」
- Kさん「生きているとは何か, 自殺」
- N(Y)さん「若者の自殺, 老化」
- Mさん「いじめの問題」
- Eさん「それぞれに興味がある」
- N(C)さん「神話, ことば」
- Oさん「戦争と平和, 精神」
- Gさん「先天的異常の判定, 臓器移植」

総合学習の時間を特設しての試みが考えられてから3年。高3での実施に向けての授業計画づくりが始められてから1年。そして今年からようやく「総合学習」の授業が始まった。以下に, 「生命について」を展開して行くための, 各自の分担した小テーマの授業計画を掲げたい。

## 2. 総合学習——生命について——の三つの授業案

徳井輝雄

### ① はじめに

この総合学習——生命について——の17の授業全体を貫いて流れる指導理念の一つは, 生命について多方面から学ぶことにより, 生命の尊さを深く知ることにある。自分の命は勿論のこと, 他人の命, 人間以外の生き物も含めて命あるものすべてを尊重する生命観を育てていこうとするものである。

残念ながらこの世には, その尊重すべき生命を脅かすものが存在する。この三つの授業案は, そういう尊重すべき生命を脅かすものが存在することを, はっきりと認識することを狙いとしたものであり, さらに, それぞれの授業において取り上げたテーマに関連した課題を提起し, その後に予定している, 生徒の調査・研究への動機づけをも兼ねている。

### ② 生命を脅かすもの

#### (2-1) 核エネルギーと農業

生命を脅かすものとして第一に挙げなければならないのは戦争である。戦争は人間の命を奪うだけでなく地球上の生物全体の命をも大量に奪う。とくに, 核戦争が勃発すれば, どのような事が地球上に出現するかについては, 多くの試論が出され論議されているところである。

さらには, 人間の生産活動とくに利潤至上主義や, 狭い効率第一主義の下で行われる商品生産を目的とした生産活動にともなう公害——自然破壊——が挙げられる。これは戦争とは違い, 生産というプラスイメージの下で発生し, 人々に認識されにくい状態で徐々に進行していく事が多い。また顕在化しいわゆる公害事件となった場合でも, その因果関係をめぐって利害の対立する立場からさまざまな議論がなされるという性格をもっている。そういう点からも是非取上げたいテーマである。

このように戦争と公害は, あらわれ方は異なるにせ

よ、生命を脅かす最大のものであることには間違いはない。これをどう授業で扱うのが良いだろうか。筆者はこれを同時に並列させて扱うことにした。その為には具体物として核エネルギーと農業を取り上げることがよいと考えた。

戦争と公害という二つの「生命を脅かす」ものの中で共通して顔を出しているものが、核エネルギーと農業である。この二つを生徒に提起し、科学技術の成果が、生命を脅かすものになっていくのは何故だろうということと共に考えていく。

### (2-2) 人口論のもつ問題点

生命を一瞬のうちに奪う戦争とは違い、生命が持続していくことを妨げるものに、農業や放射能による遺伝障害のほかに、全く違った問題として、人口問題がある。これは、この世から戦争がなくなったとしても残る問題であろう。

生態学での過剰繁殖という概念からみれば、人間はたしかに、すでに、過剰に繁殖しており、それが人間はもちろんのこと、他の生物にも負の影響を与えていることは確かである。

ここでは、このような現状から生じているいわゆる人口爆発を懸念する人口論のもつ問題点に的を絞る。問題点とは、人口爆発にともなう産児制限政策の現実が産児制限を叫ぶ階層や国々と、産児制限をさせられる階層や国々が、それぞれ異なるということである。もう一つは、人口抑制政策と労働人口の減少との関係である。これらの問題点を生徒に提起し共に考えていく。

### (2-3) 人間の生き生きとした生命活動を脅かすものとしての労働での疎外状況

生命が持続していく時、とくに人間の場合においては、ただ生きているというだけでなく、生き生きとしたものでなくてはならない。生命感溢れる生き方、躍動する生命とは何かを追求することは大切である。まず生き生きとした生命活動とは何をさすのかを考えたい。生きもの全体にとってみれば、それは健康であるということであり、生態系が調和していて食物連鎖がうまく行われていることである。しかし人間にとってはそれだけではない。人間の活動の主なもの占める生産活動(労働)が生き生きとしたものでなくてはならない。大量生産方式がもつ欠点として、機械のペースに人間が合わせていくという逆転現象が挙げられる。世の中が工業における大量生産方式による流れ作業のリズムにシンクロナイズされている。この同期化現象は果して人間を生き生きとしたものにしていくのだろうか、それともジワジワと生命を脅かすものになっているのではないだろうか。このように、ここでは、労働における疎外状況を生徒と共にみていく。

## ③ 授業案

②で述べた事柄を内容として授業を組立てるとおよそ次のようなものになる。

### (3-1) 戦争と公害——生命を脅かすもの—— (授業案Ⅰ)

#### ○ 導入

1. ベトナム戦争で枯葉剤を米軍が散布しているところをVTRでみせる。
2. ベトナム戦争の写真をみせる。
3. ダイオキシン汚染を報ずる日本の新聞記事を見せる。

ベトナム戦争で使われた枯葉剤は、平和時の日本でも農業として使われていることを知る。

#### ○ 展開

1. ダイオキシンとは何か、どのような性質をもっているかについて知る。遺伝子への影響。
2. 農業のもつ二つの顔について注意を促す。  
生産手段としての農業  
兵器としての農業
3. 討論  
科学技術の成果が生命を脅かすものになってしまうのは何故だろう。

#### ○ 終結

1. 展開での討論のまとめ
2. 科学技術の成果がこのようになってしまう他の例はないだろうかを生徒に尋ねる。その典型としての核エネルギーが出て来ることをここで期待する。

核エネルギーについては、公害面ではソ連原発事故を例にし、戦争においては核兵器として使われたヒロシマ・ナガサキを例にして、人間にとってそのむずかしくおそろしい面とはどんなことなのかを研究すること及び、地球凍結などのVTRを例にとって、地球上の全生命にとってどんなものなのかを予想することなどを今後の自由研究の重要な課題として残す。

### (3-2) 人口論の問題点(授業案Ⅱ)

#### ○ 導入

一年生時の現代社会で学んだ人口爆発について各生徒に質問して、一般的に人口論で説かれている内容を復習する。

人類の繁栄が人類の滅亡の原因の一つになるという矛盾の存在に気付く。

#### ○ 展開

1. 産児制限政策の問題点  
インド、中国
2. いわゆる先進国において人口爆発が沈静化している原因

朝日新聞のマンガ“ペイスケ”を示して自己家畜化現象はないか、を問う。

3. 日本において産児制限を第三世界に向けて叫んでいる人達はどんな人達かを知る。

○ 終結

1. 人口抑制政策の問題点  
人口を抑制する側とされる側。国や個人のレベルにて。  
労働人口の減少
2. 人口を抑制しない時、生産力向上のみで解決できるか。
3. 生態学的な意味で消費者としての人間は、他の生命体を喰って自己の生命体を維持させていることのもつ意味は何かについて考える。

終結における諸問題は、生徒の今後の研究課題となっていく。

(3-3) 生き生きとした生命活動を脅かすもの (授業案Ⅲ)

○ 導入

1. 生き生きとした生命活動とは何か  
どんな時に生き生きとするか生徒に質問をする。
2. 健康であることのほかに、生き生きとするとはどんなことを生徒に質問する。

<予想>

好きなことをしている。  
友人としゃべっている。  
おいしいものを喰べている。 } などが出てくるであろう。

最近のNHKの調査(小学5年対象)では寝ていることが一番楽しいというのもあった。これではまさに子供は生き生きとはしていないといえる。

○ 展開

1. 脳の発達からみたヒトへの進化
2. 手を動かすことがヒトを作る  
VTRで脳の細胞が動いてネットワークを作ろうとしているところをみせる。  
脳に刺激を与えるものとしての手のはたらき、その手を使ってヒトは労働し人間となっていく。
3. その労働の現状はどうなっているか。  
労働の現状、とくに大量生産工場の現状を知るには、工場見学がよいが、それができない時は、父母から職場の話聞き出すなどもよい。これらは宿題としてもよい。また、VTRでチャップリンのモダンタイムスをみせるのも良いが、これを書いている時点ではまだ入手できていない。
4. 生き生きとしない理由は何か。

生徒の中には、授業中に居眠りしている者もいる。そういう生徒に聞いてみる。

<予想される返答>

嫌いなことを学ばされる。  
興味がない。わからない。  
朝早く起きれずむりに起きるとボーッとする。

○ 終結

1. 労働がヒトを作る。
2. その労働が逆に人間らしさを失わせることがある。原子力発電所の例など労働災害などに注目。
3. 余暇活動や、休息している時にしか生き生きとできないのは問題ではないか、労働の中で生き生きすること、生徒の立場でいえば、勉強の中で生き生きすることの方がより本質的ではないかということを知らせる。
4. 生き生きするための条件を探す——これが今後への課題となる。

④ あとがき

以上示した三つの授業案は、1986年6月以降に実施する予定である。教師側の、これだけは教えたいという主観的願望にもとづいた「案」であるため、実際にはどうなるか予想のつかない面がある。このあとがきを書いている時点で、すでに二つの授業が二人の教師によって実施されたが、現実はきびしい。居眠りをする生徒、他のことをせさせとやっている生徒がいる。

指導案を作る際には、導入はできるだけ劇的にと心掛けたが、三つのうち二つは、生徒への質問という形で入ることにした。残りの一つは映像から入る。どちらがよいか結果をみたい。生徒同士、生徒と教師との間での討論をなるべく多くしたいとも心掛けた。この討論がうまくいくか疑問である。最近の生徒は討論に慣れていないからだ。しかしそれだからこそ、討論させたい。身近な問題と関連づける——これは、労働の疎外を教えるところではなかなかむずかしいことである。彼等はまだ労働戦線に投入されていないからだ。しかしいずれ労働者になるのである。あるいは父母の姿を見ている。したがって興味をもつはずではある。

この三つの授業案は全体として生命を脅かすものへの認識を深めることを狙いとしたが、それがどの程度達成できたかについては次回に報告をする。